技術・家庭科［家庭分野］

柴　静子・伊藤　圭子・浦上千歳

Ⅰ　はじめに

本年度より，東雲小学校・東雲中学校では，「『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造」をテーマに設定して実践研究を始めることとなった。本研究における「グローバル時代をきりひらく資質・能力」は，先行研究と先進校の取り組み，本校の目標を踏まえて「さまざまな文化や価値観を理解し認め合いながら，自分の考えを明確にして問題解決する力」と定義し，これを育成する家庭科的方略として，家庭科の授業において，その核となる生活者・消費者としての視点をさらに意識化させる実践を考える。

平成元年の学習指導要領の改訂により，家庭科で環境教育が位置づけられた。その内容は，３R（Reduce・Reuse・Recycle）の How　to の実践が中心であった。平成 20 年，中央教育審議会は，我が国の新しい教育の方向性として「競争」と「共存・協力」の２つの能力の必要性を示し，その答申で，「世界や我が国社会が持続可能な発展を遂げるために協力しながら積極的に対応すべき課題」として環境問題を位置づけ直し，ESD の充実をあげている。

文部科学省の日本ユネスコ国内委員会(2013)において ESD（Education　for　Sustainable Development）は，「持続可能な開発のための教育」と訳されており，その実施における２つの観点として「①人格の発達や，自律心，判断力，責任感など人間性を育くむこと」，「②他人との関係性，社会との関係性，自然環境との関係性を認識し，関わり，つながりを尊重できる個人を育むこと」をあげている。そして，特に②に関しては，家庭科教育がこれまで目指してきたことと一致する。

従来の家庭科の学習では，「現在の私たちがより良い生活を営むための意志決定」を考えてきたが，それを「世界や未来の人々のことも考えた上でのより良い生活を営むための意志決定」に変換していくことが，持続可能な社会を可能にする価値観と行動変革につながっていくと信清(2014)はいっている。これまでも，未来の社会の担い手を育成すべく教育活動を行ってきているが，現在の生活を見直し改めていく課題解決が多く見られた。それは，現在の生活に根ざした実践であり家庭科的役割は大きい。今後は，それに加えてさらに，視野を広げ，目の前に見えていないことに対しても想像し，そこから新たな課題を発見し解決しようとする人材の育成を目指す。

家庭科では，ESD を，私たちの生活が，世界の経済・社会・環境などの諸側面や，過去の世代と将来とのつながりの中で成立していることを意識し，行動変革を促す教育ととらえており，この ESD を基盤とした家庭科の授業のあり方を追究することが，今年度，本校が研究テーマとした「『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造」につながると考えた。

生活者・消費者としての視点は，他教科には見られないが，技術・家庭科の授業作りにおいて，どの領域においても欠かすことのできない重要な核となる。小学校・中学校を問わず，「多様性」「協動性」「主体性」を育む課題解決場面の設定に焦点をあてて授業開発し，かかわりを尊重できる，さらに，世界や未来を考えた意志決定ができる子どもの育成を目指す。

本研究において「多様性」とは，自国および他国の伝統・文化の違いを知り，尊重できる力，「協働性」とは，様々な情報や意志，思想，態度をお互い尊重し合い，コミュニケーションできる力，「主体性」とは，自ら課題を判断し，解決に向けて選択・決定できる力としている。

Ⅱ　本年度の研究計画

１　研究の目的

生活者・消費者としての視点を核として「世界や未来を考えた意志決定ができる子ども」を育成する家庭科の授業づくりの視点を見いだす。

２　研究方法

(1) 学会資料や文献の調査から，家庭科教育としてのグローバルの視点を整理する。

(2) 授業を行って，アンケート調査から「多様性」「協動性」「主体性」における個の変容をさぐる。

３　研究会当日の授業

中学校２年を対象に，領域Ｃ「衣生活･住生活と自立」と領域Ａ「家族・家庭と子どもの成長」を融合した題材を設定した。領域Ｃの内容としては，布についての学習をその歴史をひもときながら，繊維の性質や特徴を学ばせる。ここでは，布にまつわる日本の伝統文化にも触れることになる。領域Ａの内容としては，発展途上国（モン族）の生活を紹介し，そこに暮らす子どもたちに目を向ける学習を行った。これらの学習を通して，日本の子供たちと同様にモン族の子どもたちへも思いをはせ，おもちゃ製作として表現活動させている。本時では，モン族の保育園の保育士さんに，自分たちが製作したおもちゃを届ける総仕上げとして，レシピカードの作成を行う。